伝文

日本口承文芸学会　会報
第 71 号　2022 年 9 月　発行
日本口承文芸学会
〒182-8525　東京都調布市緑ヶ丘 1－25
白百合女子大学人間総合学部　間宮史子研究室
Tel：03-3326-5144（内線 1207）
Fax: 03-3326-1319（児童文化研究センター）
E-mail: info@ko-sho.org

ハロウィン・カード類の文化表象

飯島　吉晴

最近、アメリカの大衆文化のハロウィンは、グルメ・仮装（コスプレ）・ディスプレイ（装飾）などを中心に日本でも秋のイベントとしてすっかり普及し定着してきている。このハロウィンは古代ケルト人のサルウィン祭に遡るといい、この祭りは夏（光）の終わりと冬（闇）の始まりに当たる 10 月 31 日の前夜祭と 11 月 1 日の祝祭からなり、死者の魂を迎えてともに収穫をいわう祭理であった。アメリカへはケルト文化が色濃く残るアイルランド系の移民によってハロウィンが伝えられ、カボチャの提灯（ジャック・オ・ランタン）もカブから新大陸原産のカボチャに変わって、仮装した子供たちが「お菓子をくれなきゃいたずらするぞ（Trick or Treat）」といって近所の家を回って歩く習慣が主流となっているようだ。オレンジ色のマリーゴールドの花と骸骨の作り物であふれる有名なメキシコの「死者の祭」（10 月 31 日～11 月 2 日）も、墓から死者の魂を迎えてもてなし生者の子孫とともに会食するというハロウィン系の祭りで、我が国の盂蘭盆会に相当するといえる。

ところで、このハロウィンの特色の一つであるカボチャの提灯について調べてみると、実は江戸から明治にかけての歌舞伎にもとづく浮世絵や化け物尽くし絵のなかにカボチャのお化けや提灯がすでに描かれていることがわかった。新大陸由来の奇っ怪な野菜カボチャは近世初期に南蛮人によって伝えられ、蛇が入っているとか指を差すと腐るといった俗信や昔話「猫とカボチャ」などに見られるように、常に奇怪性、逸脱性、悪魔性などがまとわりついており、民間信仰研究の上で興味深い研究対象でもある。これらの図像は、実際のカボチャの提灯ではなく先行例とはいいがたいが、ハロウィンのポストカードやイラストなどの絵画表現と比較研究すると、東西の世界観や宗教観の差異が明らかにできるのではなかろうか。幸い、たとえば Pinterest というサイトでハロウィンを検索すると、ネット上で多くの材料を見出すことができる。

ハロウィンのカード類には、カボチャの提灯とともに、コウモリ、カラス、フクロウ、黒猫、蜘蛛と蜘蛛の巣、骸骨、お化け、墓地、幽霊屋敷、悪魔の木、箒にのった魔女、鍋で薬草を煮る魔女、魔法使い、月など闇や夜の世界に属すモチーフが多く描かれ、異界との関係を示す片目表象もみられる。カササギやコウモリは一般に西洋では不吉な動物とみなされているが、中国では喜鵲（七夕に橋をかける鳥）や蝙蝠と表記し語音からむしろおめでたい幸運の鳥とされている。またフクロウは、古代ギリシアの知恵の女神ミネルバの使いとされ賢しさの象徴でもあるが、一方で中国などでは羽角をもち夜鳴く鳥である梟はむしろ忌まれがちである。細かく分析すると面白いテーマとなるだろう。なお、拙稿「ハロウィンの妖怪文化論」（『子どもの文化』53 巻 10 号、2021 年）も参照されたい。

（東京都）

第81回研究例会報告　2022年3月20日（日）　ZOOMにて

「シンポジウム：東日本大震災から11年 ―震災をめぐる現場の声と研究者―」

山田　栄克（東京都）

2022年3月20日（日）にzoomを用いたオンライン形式で、第81回・日本口承文芸学会例会が「東日本大震災から11年 ―震災をめぐる現場の声と研究者―」と題してシンポジウム形式で開催された。

報告者の一人目は**「庄司アイさんの遺志を継ぐ」**と題した**石井正己氏**であった。津波の甚大な被害にあった宮城県山元町の「やまもと民話の会」が編んだ『小さな町を呑みこんだ　巨大津波』がどのように生まれたのかを、その中心人物であった庄司アイ氏に聞いていたことを基とした報告である。そこには庄司氏のどうにか震災の現場にあった想いを薄れさせまいとした直後の動きと、状況が一人一人異なることへの取材の難しさをはじめとした戸惑い、永遠に語り継ぐ難しさ、そして民話の力で復興を支えるという強い意思があったという。そうしてできあがったものをどのように伝えていくか、震災のことは朗読したくはないが大切な事だから伝えていかなくてはという思いからの紙芝居化などについても触れて、こうした蓄積をどう活かしていくかという課題を挙げた。

国立歴史民俗博物館第4展示室「民俗」尾形家住宅模型

続けて震災直後に国立歴史民俗博物館のスタッフとして宮城県気仙沼市の文化財レスキューに携わった**葉山茂氏**の報告であった。葉山氏は第62回研究例会「三・一一　一年後から」でもパネリストとして登壇しているが、それからの十年を経て物質を取り巻く身体的経験について**「物語ることと身体的経験―気仙沼の被災資料整理の現場から」**という報告であった。気仙沼市の文化財レスキューの特徴は所有者のみならず、市民も参加したことで経験の共有、文化的差異の発見の場となった。そして、切り離された物質と物語の語り－「語り」とは語りを使って獲得した経験の世界から出た言葉 －であり、物語の再編の過程であるとして上で、それらを「経験の保全」と述べた。

2016.8　解体予定の民家からの民具の救出
2014.6　神社の奉納品の救出

内山大介氏は福島県立博物館の学芸員として震災と向き合ったことを**「震災をめぐるモノと物語の継承―博物館学芸員と東日本大震災―」**と題して報告した。福島県は他県と違い放射能とそれによる立ち入り禁止による文化財のカビの被害が大きかったという。そして震災遺産として「もの」の背景にある物語、「もの」を起点に無数の小さな物語を絶えず醸成していくことを目指しているとした。震災をそれぞれの「自分事化」へしていくということが大切であり、そのためにも震災遺産は一方的に震災経験を押し付けるものではなく「もの」を介してのやりとりを生むものであると述べた。

北村規子氏は「津浪と木」と題して震災後に取り上げられた樹木に着目した。樹木によって助かった話などの伝承は沖縄で確認できるが、東日本大震災に関連しては語られておらず、まだ話としては熟していないという。また、東日本大震災で被災した地では植樹が行われていることを取り上げ、石碑は完成すればそれで終わってしまう、いわば自己完結してしまうものだが、樹木は手間がかかり、花を咲かせるためには手間

がかかる分、忘れる事はできないというマイナスではない感情がそこにはあるとした。実際に多くの犠牲者を出した宮城県石巻市の大川小学校の事例を取り上げながらそのことを紹介した。このように樹木には防災・慰霊・生きがいの意味があるという。

それぞれ異なった震災と向き合ってきた四方の報告をもとに、現状として文化財制度と震災の難しさ、震災を負の記憶として残さないように意図的に遠いところに置きたいという意識による語り継ぐ事の難しさなどの意見交換がなされた。

十年を経て、私たちは何ができて何ができなかったのか。そしてこれから何ができるのか。目まぐるしい社会情勢の変化の中でこれからを考える機会となった。

第 46 回日本口承文芸学会大会・報告

【公開講演】　2022 年 6 月 4 日（土）於 札幌大学/対面形式とオンライン形式（ZOOM）併用

石井 正己 氏「萩中美枝さんとアイヌの口承文芸研究」（オンライン）

加藤　耕義（東京都）

6月4日午後、石井正己氏の公開講演は遠隔（Zoom）にて行われた。

萩中美枝氏は2021年4月4日に93歳で亡くなった。萩中氏はアイヌ口承文芸研究者であり、アイヌ語学者であり、そして知里真志保氏の妻であり、日本口承文芸学会の会員だった。石井氏の講演では、萩中氏が知里真志保氏の妻だったことと、日本口承文芸学会の会員だったことを軸に萩中氏の功績を振り返り、これからの口承文芸研究について考察を広げた。

萩中氏の夫知里真志保氏はアイヌ出身で、東京帝国大学で言語学を修め、北海道大学で教授を務めた。1956年に萩中氏と結婚し、1961年に52歳で亡くなったので、結婚生活は5年ほどという短い期間だった。知里真志保氏の遺産のひとつは多くの著述であり、もうひとつは妻の萩中氏だと石井氏は述べる。知里氏は萩中氏がアイヌ語を聞くことができるとNHKに売り込み、萩中氏はNHKの『アイヌ伝統音楽』のスタッフに加わり、アイヌ語の世界へと入っていった。

萩中氏は自身が学会に育てられたといって、好んで「日本口承文芸学会会員」の肩書きを使ったという。萩中氏は、衣食住を始め広い視野でアイヌ研究やアイヌ文芸研究を行ったが、その中でもっとも深い関心を持って研究したのが、口承文芸の問題だったと石井氏は指摘する。

1982年の『ユーカラと女』の中では、熊を送るまつりの映画撮影の際に、萩中氏がミシンで大量生産したアイヌの衣モウルを持っていくと、フチ（おばあさま）たちが胸紐を見て「ヌマッポ（胸紐よ！）」と歓喜の声を上げたと報告し、「まるで恋人にでも出会ったようであった。女であれば、誰もが経験する少女から大人になろうとするときの不安と羞らい、その思いをアイヌの女たちは胸紐に託したのではなかろうか」と述べている。石井氏は「まさに萩中さんが、女性でなければ見ることができなかった、女性でなければ書けなかったことを見事に論文の中で書いている」と指摘する。

知里真志保の義理の姉知里幸恵（1922 年没）の『アイヌ神謡集』（1923 年）について、萩中氏は幸恵の稿による訳詞の変更を指摘し、幸恵の文学性の才が「むしろ語る文学であるユーカラに微妙な影を落とし

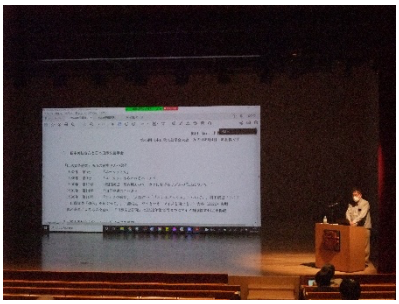
てはいまいか」と書いている。石井氏は、口承文芸研究者がきちんといわなければいけないことを、萩中氏がいっているということはきわめて大事なことだと指摘している。

また石井氏は、萩中氏が「アイヌの歌謡」（1996 年『口承文芸研究 19 号』）の中で、虹に関する歌を紹介していることを引いて、虹も雨を降らせるので、アイヌの中では虹がけっして美しいものではないということは広く知られているとし、萩中氏の次の文を紹介した。「今は虹を見ても美しいと感じ、静かな暮らしを良しとする。その感覚は現在の生活からの発想である。アイヌ語を使っていた時代は、きびしい自然と向き合いながら、しかも豊かに生き生きと暮らしていた。その中から優れた口承文芸が生まれ、発達したのである。アイヌの若い人たちが柔軟な考え方で、もう一度口承文芸を見直してくれることを願う。いまの生活からではなく、いまの生活に置き換えてみてほしい。いまでも立派に通用することに気付き、新鮮な考えが展開するに違いない。」

石井氏は、「アイヌの口承文芸に力を注いだ萩中さんが、学会を大事な場所と考えたことが非常によくわかる。萩中さんがいう『今の生活に置き換えられる』ということ、口承文芸がなぜ大事なのかというその意義をきちんとこの学会が示す必要がある。私自身もそうした研究がしてみたい」と述べた。

奥田 統己 氏「萩中美枝さんのフィールドワーク」

志賀　雪湖（千葉県）



奥田氏はまず、講演依頼を光栄に思い引き受けたものの、追悼文集「萩中美枝さんとアイヌ研究」（2022）に寄稿された児島恭子さんの方が適役だったのではないかと、児島さんの「萩中さんのこと」の見解を引用しながら話を進められた。萩中さんは1982年から本学会にて研究発表を、学会誌には論考を発表し続け、それが1990年の奥田氏の研究発表への道筋になったのだそうだ。その後本学会は、アイヌ文学研究の後進が研究発表をする場として定着する。アイヌ文学・口頭伝承の研究と本学会との深い縁は、萩中さんあってのものだった。1961年に知里真志保、1971年に金田一京助、久保寺逸彦らの亡きあと、萩中さんがアイヌ文学研究の面白さを発信し続けたからこそ後進が育ったのだ。

つぎに、『北海道博物館アイヌ民族文化研究センター研究紀要』７所収の小川正人さんの「萩中美枝書誌」に基づき「萩中さんのフィールドワークの軌跡」、「萩中美枝さんの著作とフィールドワーク」について分析。奥田氏によると1970年までの萩中さんの発表は、真志保や幸恵（真志保の姉で『アイヌ神謡集』の編訳者）についての、アイヌの人々の暮らしについての随筆だったが、1971年以降は論考報告とするにふさわしい変化があり、それには知里の影響はないという。萩中さん独自の研究だ。

そしてフィールドワークについても同じことがいえるという。「萩中さんと八重九郎さん」「八重九郎さんへのフィールドワーク」について。1972年に八重九郎さん（1978年没）が執り行った「チャシ跡のカムイノミ」の音声を奥田氏が文字化して解説。チャシとは「砦、城」、カムイノミとは「神への祈り」という意味で、祈りの内容について萩中さんが八重さんに質問する様子を「萩中さんのすごみ」と称された。「（お神酒を）4回、別々に、あげたでしょう、神様に」という萩中さんの問いに、「普通であれば言われないんですよ。神様に対していったん拝んで言った言葉を」としぶる八重さん。しかし結局、八重さんは答えた。語り手が言いたがらないことも上手に交渉して引き出していると奥田氏は指摘した。萩中さ

んは、難しいカムイノミを聞いて理解し、その場で質問できるフィールドワーカーだったのである。萩中さんと一緒に仕事をした奥田氏ならではの報告、再評価であった。

奥田氏は最後に、ココアパウダーとミルクだけでつくるココアを作って差し上げたら萩中さんがおいしいと言ってくださったという思い出も披露された。なお、石井正己氏の報告にあったモウルについて、奥田氏は部屋着のようなものだと教わったと冒頭に一言あったことも申し添える。

公演「アイヌ古式舞踊」 一般社団法人札幌大学ウレシパクラブ

米屋　陽一（千葉県）

6月4日㈯、第46回大会（札幌大学）第1日、公開講演会後、札幌大学ウレシパクラブ（学生会員25名/代表=織田瑞希さん・3年）による「アイヌ古式舞踊」の公演。メンバーの繊細な身体表現による熱演に会場は熱気に包まれた。内容は、①ムックリ（口琴）②ハララキ（湿原のツルの踊り）③クリムセ（弓の舞）④フンペリムセ（クジラの踊り）⑤ウポポ（座り歌）チュプカワ・アマミウタ・ヘトウニプ（3曲）⑥エムシリムセ（剣の舞）⑦フッタレチュイ（女性の黒髪の踊り）⑧イオマンテリムセ（熊送りの踊り）。アイヌの古式舞踊や口承文芸など、アイヌ文化を学び社会に発信している姿を会場で実感することができた。嬉しいことであった。

札幌大学は2010年にウレシパ・プロジェクトを導入。ウレシパとは育て合うという意味のアイヌ語。ウレシパクラブはこのプロジェクトの推進母体。プロジェクトの3本柱。Ⅰウレシパ奨学生制度：アイヌ文化を学習・発信し、次代のリーダーとなる人を目指す。Ⅱウレシパ・カンパニー制度：会員企業にそのような学生を一緒に育てていただく。Ⅲアイヌ民族のみならず和人学生・留学生もともにアイヌ文化を学び、多文化共生のモデルとなる集団を形成し社会に発信する。

奨学生第1期3名。岡田勇樹さん=札幌大学でウレシパおよびアイヌ文化担当職員として後進の指導。北嶋由紀さん=国立アイヌ民族博物館学芸員、今春から札幌大学非常勤講師。山本りえさん（旧姓）=二風谷で伝承者として活躍中。2013年に一般社団法人化。現在、会員214名、企業会員52社。執筆にあたり、札幌大学の本田優子教授、ウレシパクラブのみなさんからご教示を賜った。

【研究発表報告】６月５日（日）

佐藤　優（岩手県）

小柳紫乃氏「昔話における「男に化ける狐」―民俗文化のなかの認識―」（オンライン）

本発表は、昔話に登場する動物の中でも多様なキャラクター像が付与されているキツネについて考察したものであった。

キツネは、「女狐」ということばからもうかがえるように、一般的に知られているのは女性に化けるも

のである。だが、小柳氏は、『義経千本桜』の「狐忠信」や狂言《釣狐》の白蔵主など男性に化けるキツネに注目する。そして、キツネがどのような人間に化けるかについて、女性の場合はほどんどが「若い女」であるのに対し、男性の場合「役人」系・「下男」系・「身近な人間」系の３種に分類できると指摘している。また、化ける動機については、「人間を騙すことでキツネが利を得る場合」・「明確な目的は不明だが何らかの利をねらっていると推測できる場合」、「キツネの行動が人間の損得に直接関係がない場合」に分類している。こうした検討を経て、「昔話における男に化ける狐は、狐を人間よりも下位の存在として認識している側面が色濃く出」ていると結論づけている。

発表の視点は、興味深いものであり、考察の進め方も基本的な研究手法を駆使したものであった。ただ、検討材料が、話の梗概だけであったのが惜しまれる。一話一話そのもの（あるいは自身の調査資料）を資料とし、それに基づく分析結果を提示いただけたなら、より詳細な研究発表になったのではないか。こうした点を今後の研究に活かしていただき、さらなる研究の発展を期待したい。

中根優希氏「昔話「犬聟入」再考―伝承と文学の関係に注目して―」（オンライン）

中根氏の発表は、異類婚姻譚として分類されている「犬聟入」について、口頭伝承の背景に記載文芸の影響があるのではないかという見通しに基づくものであった。この見通しは、先行研究でもこの話の淵源が中国の槃瓠説話にあり『後漢書』にも類話があるという指摘に起因するものだといえるだろう。さらに中根氏は、『犬猫怪話竹篦太郎』や『南総里見八犬伝』などの近世文芸にも「犬聟入」のモティーフが組み込まれていることから、こうした研究視角からの分析が必要であると指摘した。

具体的な発表内容は、昔話「犬聟入」の伝承地一覧を提示し、分布実態を確認した上で記載文芸におけるモティーフ分析をおこない、さらに昔話伝承の背景に記載文芸の影響が濃厚とみなされる宮城県の事例について考察をおこなった。結論としては、近世期における出版文化の広がりにより上記した文芸作品が、多様な階層に享受された結果、「犬聟入」のモティーフとして組み込まれたとされた。

口頭伝承と文字文化の影響関係について論じたものであり、大変興味深い内容であった。こうした研究視角は、川島秀一氏の『「本読み」の民俗誌』と深く関わるものだといえよう。伝承と文字との関係については、川島氏も論じているようにそれを結び付ける媒介（読み聞かせをする人・学校・貸本屋など）も重要な論点となる。こうした点について、より細やかな検討を加え、この問題群に新しい研究の切り口を提示していただきたい。

内藤浩誉氏「源頼朝を巡る女性たち考―伊豆における北条政子・八重姫・静御前の伝説―」

今回は、内藤氏が長年追求されている静御前伝説についてより広い視野からのご発表であり、源頼朝をめぐる女性たちの伝説について考察された。内藤氏の問題意識は、いわゆる「水の女」をキーワードとし、在地でこうした伝説がどのような語られ方をされているのかについて、自然景観や土地の災害史と関連させながら検討された。

具体的には、今年のNHK大河ドラマの撮影地でもある静岡県伊豆の国市で伝えられている北条政子・八重姫・静御前の伝説についてであり、自身のフィールドワークと近世地誌を中心とした史資料の分析し、この地が低地で水害を受け続けた土地の歴史を指摘した。そして、水にまつわる伝説は、土地が元々持っていた性質を理解する指標であることを指摘した。また、これを応用すれば、水と無縁に見える土地でも水害の危険性を示すものとしても受け取ることができ、防災面にも有益であると考察された。

こうした意識は、齊藤純氏が追求されている一連の「ホラ抜け」伝承とも関わるといえるだろう。また、伝承研究の社会的貢献の一事例として好個の材料であり、今後さらなる考察が俟たれる。課題として

は、こうした研究視角をどのように一般的に普及させてゆくか、その実践例も付加してゆく必要があるだろう。また、伝承研究の面からは、今回の分析手法をより精緻にすることで、「女」の伝説から「固有名詞を持つ女」の伝説への展開史についても明らかになると思われる。

野村　典彦（東京都）

高木史人氏「「問い手」の欲望としての〈口承〉――〈資料としての私（たち）〉を自覚することからみえること」

矢野敬一氏「「空気」・軍隊語・現代民話考――資料としての私たち」

菊地暁氏「道産子が民俗学を学んで『ライフヒストリーレポート選』を編むまで――資料としての私（たち）――」

高木史人、矢野敬一、菊地暁各氏の発表は、〈資料としての私たち〉を共通のテーマとした。“北海道出身者に民俗学はできない”と言われた頃に採集されたものが学問の対象なのか。アマビエなど表層の記録に満足することなく、口承を考えてきた〈私たち〉がコロナ禍の日常を如何に捉え返すのか、という問いとしても有効だろう。〈アイヌ〉文化の今日が理解され、一人ひとりの人生を尊重した上で行われる継承が考えられる場であると同時に、アイヌの人々から大地を奪い取った人々や彼らを送り出した者を先祖とする〈道産子〉〈内地の人〉の今日が考えられる場でもある札幌会場。そして画面ごしの会員。それも〈私たち〉だ。

高木発表は昔話資料集の中に研究者の姿を確認する。語り手だけでは昔話は成立しない。高木は「問い手」という言葉を用意して研究の場・調査の場に〈私たち〉の姿をみた。

矢野発表は、軍隊語による空気の醸成を説いた山本七平の仕事を紹介。話型整理に束縛のない松谷みよ子の戦争・軍隊を巡る報告を用いて空気からの解放の困難を指摘。コロナ禍の空気の呪縛を解く言葉の必要を訴えた。

菊地発表は、近代に拓かれた北海道出身者が前近代以来の伝承を扱う中での気づき、授業実践としてのライフストーリー記録を報告。話し手と聞き手が出会う現在の上に、一人ひとりの日常や一人ひとりの歴史を拾い上げた。

残されたカードが示す通り柳田国男は近代科学を受け入れた。“大成番号”で管理したり、エクセルで表を作ったり。「研究者が“対象”を観察、記録、分析する」という近代的発想の、「客観」を信じた研究を高木は批判してきた。話型の外、表の外にある一人ひとりの人生を切り捨てるなという警告でもあった。生の言葉のやりとりを不適切とする不自由な空気の中で、〈私たち〉という視座は、声の、言葉の伝承を考えてきた学問の今後を問う。ただし、コロナ対策という科学最優先の緊急事態以前、病院では「語り（ナラティブ）」による医療（メディシン）が模索されていた。民俗学が輸入、「接ぎ木」した「語り」に違和感を覚えるのは私だけではあるまい。「言い手・問い手」という新鮮な言葉が、「語り」を見失うことを導いてはならない。

阪口　諒（北海道）

奥田統己氏「アイヌ口頭文芸の継承における語り手と学習者の諸権利」

本発表は、当事者の意識との向き合い方に関して、アイヌ口頭文芸の知的財産権と文化の自己決定権という観点から考察したものである。まず、口頭伝承でレパートリーを形成してきた世代の語り手は、伝承元として個人を意識しつつ地域を超えて物語の伝承を行ってきたこと、あらすじを保存しつつ常套句と新たな表

現を組み合わせることで物語を伝承してきたと述べた。発表者は、伝統的に同じ表現が受け継がれてきた歌謡などは、著作権法的にも同じ表現で受け継ぐことが出来、伝統的に新たな表現で受け継がれてきた物語は、新たな表現を生み出す技法によって新規の著作物として創作・実演するか、（保護期間内の場合）既存の著作物の許諾を得て実演すればよい（あらすじに著作権は発生しない）とした。アイヌ口頭文芸の物語ジャンルは、伝統的語り手の意識・慣行と現代的な知的財産権の間の整合性が比較的高く、双方を尊重する形で新たな学習や伝承活動を進めることが可能である、と指摘した。後半では、先住民族は、自らの発展を自由に追求する自己決定権があり、「民族固有」の文化を学ばずとも自己の文化とアイデンティティーを誇りをもって選択できるべきで、いかなる選択・追及をするにせよ、先住民族に対する支援の対象となるべきと述べた。質疑応答で発表者が述べたように、アイヌ文化の研究・教育に関わる者は、一つのあり方を奨励・誘導することなきよう、慎重な配慮が求められるだろう。

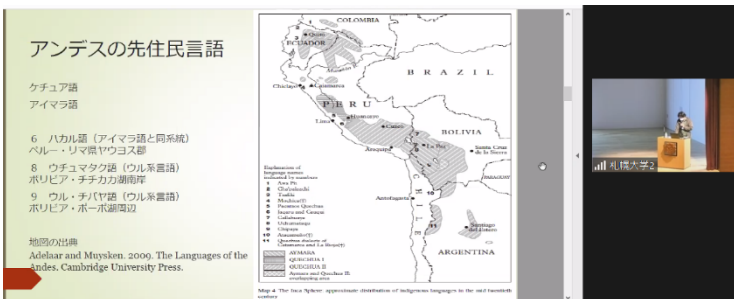
「シンポジウム：未来につなぐ口承文芸――いかに継承していくか？」

阪口　諒（北海道）

本シンポジウムの趣旨は、実践的な活動に基づいて、「今、この時代における、音声による伝承の持つ意味・機能、そしてそれがもたらす未来への可能性をどのように捉えていくか」である（予稿集より）。

まず、**木村梨乃氏（平取町アイヌ文化振興公社）、原田啓介氏（平取町アイヌ文化振興公社）、関根健司氏（平取町）による事例報告**では、マオリとの交流で学んだテアタランギ（セッションに入ると、その言語しか使わない）をアイヌ語に応用した成果として、三氏によるアイヌ語会話がなされた。関根氏は「テアタランギでは間違えても構わない、とにかくその言葉でコミュニケーションをとることを奨励している」と説明した。木村氏は「口承文芸が言語習得に役立つだけでなく、口承文芸のストーリーの理解にも繋がる」、原田氏は「アイヌ語学習を楽しんでいる様子を知ってもらい、多くの人に興味を持ってもらえれば」と述べた。最後に木村氏がヤイサマ（即興歌）を披露した。会場となった札幌大学のウレシパクラブの学生にも、卒業生の木村、原田両氏の活動は大きな刺激になったと思われる。

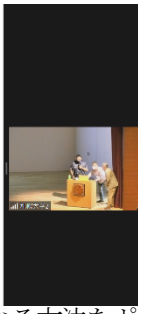
藤田護氏（慶応義塾大学）は「南米アンデス高地における口承文芸のいまと未来」という基調講演を行い、先住民言語で人々が生活を営む農村だけでなく都市においても口承文芸は生き続けていると述べた。都市では世代間の継承に問題はあるものの、アイマラ語を話す移民が都市と農村を繋ぐ形でアイマラ語を使う専門職が生まれ、口頭伝承に題材をとったラジオドラマが大きな影響を持っているという。そしてそれは、自らの社会や文化を再発見し、それをアイマラ語圏全体に拡げていこうとするという意味で、自分たちの集団に対して自ら描き出すエスノグラフィーのようになっているのだという。口承文芸は社会や歴史と切り離すことが出来ないと考えられ、このような流れをよりよ



く理解し、先に繋げていこうとすることが、都市を中心とした口承文芸をめぐる取り組みで重要だろう、と結んだ。

大原由美子氏（ハワイ大学）の「口承文芸が言語復興に果たす役割―ハワイ語の事例より」では、ことわざを中心とする口承文芸を使った教材を中心に扱われた。ハワイ先住民の文化で重視されることわざは、保育園の生徒から大学院の学生まで教育の場の儀式、スピーチで用いられる。近年、ことわざのほか、伝承を基にしたものや、身体を使った長さについてまとめた教材が作成されているという。また、ハワイ語学部の建物に地球の創造を語った神聖な祈祷が壁一面に印刷されているほか、現在は、ハワイ大学ヒロ校全体のミッション、ビジョンのほか、ハワイ語のことわざを使ってミッションを出しているホテルもあるといい、ハワイ語に対する社会の意識の変化、口承文芸の広がりが窺われた。

北原モコットゥナシ氏（北海道大学）は「チウコテシカオル　交差し、つながる道」で、学習者であろうとなかろうと、両者が共に日常的に体験するような形でアイヌ語が使われることを目指す必要があると述べた。また、非文字言語は低く見られがちで、口承文芸に対するイメージの転換が必要である一方、アイヌの言葉や物語が口承のものとして本質化されることが懸念されるとし、若い世代がかつてのように習得して伝承できなくなったこともあえて語り、過去と異なる方法をポジティブに語っていく必要があるのではないか、と指摘した。また、自分に合った切り口で触れていくことができ、それが評価されることが必要ではないかとし、学んだことを発揮する場の創出が必要である、と述べた。



パネルディスカッションにおいては、特に言語復興との関わりで様々な意見が出た。司会の本田優子氏（札幌大学）は「ハワイで出会った『言葉は一世代で消えることもあるが、一世代で取り戻すこともできる』という言葉に勇気づけられた。先進的な事例を見ることがいかに大切かと思った」と語った。また、人口の規模の大きい南米アンデス高地の事例を紹介された藤田氏が「安心して話せる場の創出がここまで大事なのかと思って聞いていた」とコメントしていたが、異なる言語・地域の事例を共有できたからこそ出た言葉かと思う。札幌大学で開催された本シンポジウムは、アイヌ語・アイヌ口承文芸の実践に関わっている学生を含む参加者が、各地の口承文芸継承の実例に触れ、未来への可能性を感じるとともに、今後の課題についてより深く考えることに繋がる、実り多いシンポジウムとなったと言えるだろう。

事務局便り

◯受贈書籍（2022年2月～2022年8月受け入れ）

・神奈川大学日本常民文化研究所『民具マンスリー』第54巻4号～12号、第55巻1号～3号　2021年7月～2022年6月
・西座理恵著『「面」と民間伝承』七月社　2022年2月
・日本民俗学会『日本民俗学』第309号改訂版・310号　2022年2月、5月
・金田久璋採話･編集『若狭あどうがたり集成』若狭路文化研究所　2022年3月
・神奈川大学日本常民文化研究所『歴史と民俗』38　平凡社　2022年3月

◯日本口承文芸学会事務局
〒182-8525　東京都調布市緑ヶ丘1－25
白百合女子大学人間総合学部　間宮史子研究室
Tel：03-3326-5144（内線1207）／ Fax: 03-3326-1319（児童文化研究センター）
E-mail: info@ko-sho.org

日本口承文芸学会を広くご紹介下さい

日本口承文芸学会への入会を希望なさる場合は、事務局にご連絡いただくか、学会ＨＰ（https://ko-sho.org/）から入会申込書をダウンロードして、ご記入のうえお送りください。
入会金なし、年会費4000円です。郵便振替口座　00180-4-44834をご利用下さい。